# ベンジャミン・フランクリン
# ―アメリカを発明した男―

佐　藤　義　隆
文化創造学部文化創造学科
（2005年11月９日受理）

# Benjamin Franklin
# ―The man Who Invented America―

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan（〒501－2592）

SATO Yoshitaka
（Received November 9，2005）

## １．はじめに

100ドル紙幣の肖像に使われているベンジャミン・フランクリンは，昨年成功裡に閉幕した愛・地球博の米国パビリオンにおいて主要な役割を演じました。「自然の叡智」を語る上で彼ほど相応しい人はいないと考えられたからです。米国パビリオンは，自然の叡智が米国史の中心的要素であることを強調し，その中心人物がベンジャミン・フランクリンであるとしています。米国の偉大な政治家であり，建国の父でもあるベンジャミン・フランクリン以上に自然の叡智を理解し，充分に捉え，共鳴したアメリカ人は殆どいないと考えられていて，彼の自然に対する飽くことなき観察力は，人々の生活を一変させるような数多くの革新につながりました。米国パビリオンは，希望，前向きな考え方，冒険心，自由といった，アメリカの中核的価値観を強調していますが，これらの礎を築いたのがベンジャミン・フランクリンでした。そういう意味では，フランスの文豪バルザックが言ったように，フランクリンはまたアメリカ合衆国も発明した，ということになります。

植民地時代のアメリカの二大文化センターは，人文科学のボストン，自然科学のフィラデルフィアでした。そのフィラデルフィアにおいてベンジャミン・フランクリンは，ルネッサンスマンと呼んでいいほど，政治，外交，科学，発明，著述等，多岐にわたって活躍し，最初の政治漫画も書いています。また，社会のために貢献し，アメリカン・ヒューマニズムの父とも呼ばれています。そして，古い曖昧な考え方を打破し，人々に理性による真を与えるべきとする思想（啓蒙思想）の実践のあらわれとしてのアメリカ革命を成し遂げる原動力となりました。これはフランス革命に受け継がれていきます。

アメリカの命名法にはいろいろありますが，愛国者の名字を実名としてつける傾向もその一つです。例えばジョージ・ワシントンのワシントンを実名にした有名人としてはワシントン・アーヴィングという作家がいます。ベンジャミン・フランクリンのフランクリンを実名にした有名人としては，第14代アメリカ大統領フランクリン・ピアスがいます

し，第32代アメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトもそうです。アメリカ人に多いフランクという名はこのフランクリンの変形です。

アメリカを知る上でベンジャミン・フランクリンのことを学ぶことは必須であり，彼が書いた『フランクリン自伝』は，独立独行の精神と必要は発明の母ということを教えてくれる点で，世界中の青少年の生き方の参考にもなっています。私も今までに何度も英語の授業でベンジャミン・フランクリンを取り上げ，学生達と一緒に彼の精神を学んできましたが，今年は彼の生誕300年なので，これを機に,彼のことをまとめておこうと思います。

## ２．ベンジャミン・フランクリンの人生の概観

ベンジャミン・フランクリンは1706年１月17日マサチューセッツ州のボストンで生まれました。父親のジョサイア・フランクリンはイギリス人で，1682年にマサチューセッツ州に移住してきました。ジョサイアは妻と３人の子供とともに来て，アメリカに来てから４人の子供が生まれました。彼の妻は1689年に死に，ジョサイアは再婚して２度目の妻との間に10人の子供を作りました。兄弟姉妹合わせて17人でベンジャミンは15番目でしたが，男の子は10人いて，彼は末っ子だったので父は彼にベンジャミンという名をつけました。というのは，聖書にでてくるベンジャミンという名がヤコブの12人の息子の末っ子だったので，ベンジャミンという名が末っ子の名として定着していたからです。ベンジャミンの愛称はベンとかベニーで，現代で有名なベンといえば，俳優にベン・アフレックという人がいます。ちなみにヤコブの愛称はジャックです。

ジョサイアは石鹸と蝋燭作りで成功していましたが，子沢山だったので，子供達全員に教育を受けさせることはできませんでした。教育費がとても高かったからです。しかし，彼はベンに牧師になってほしく，学校に通わせましたが，お金が続かず，また学校は鞭打ち等があって厳しいだけで勉強も面白くなかったので，彼は10才の時に学校をやめ，家の手伝いをしました。しかし，蝋燭作りは彼の性に合わず，家を出て船乗りになることを夢見ますが，父は彼が出ていくのを好まず，彼ができる何か他の仕事を捜し回り，ベンが読書好きだったので，読書ができる仕事に就けようと考え，ベンの異母兄のジェイムズが経営する印刷会社に世話をしました。ベン12才の時でした。兄の印刷会社にいた間，彼は貪るように本を読み，自分でいろいろなことを考え，それを短い論文等にまとめたりしています。ベンは兄といえども人から指図されるのが嫌いで，よく兄と喧嘩しました。それでベンは兄のもとを出ていく決心をしますが，兄は怒って，ボストンの印刷屋がベンを雇わないようにしてしまったので，ベンはボストンを出ていくしかありませんでした。

1723年10月，17才のベンはフィラデルフィアへ来ます。ここがその後の彼の長い生涯の故郷となります。そこで印刷工の仕事を得て，自分が能力があって働き者であることを示していきます。当時のフィラデルフィア知事ウィリアム・キースはベンが気に入り，ロンドンへ行って印刷業をもっと勉強するよう奨めてくれたのでロンドンで２年間勉強し，ヨーロッパ世界を学んで帰国します。帰国後印刷の仕事でお金を貯め，１年後には自分で印刷所を始めます。彼は有能で働き者だったので仕事はどんどんきました。1729年には経営不振だった“ペンシルヴァニア・ガゼット”という新聞を買収し，面白くて活気のある記事で埋めたのですぐに利益が上がりました。

彼は無限のエネルギーであらゆることに挑戦しました。本の売買，出版，印刷所の支店作り。若い知識人が集まって時事問題を討論できるクラブの創設。アメリカ最初の貸し出し図書館の開設。フィラデルフィアでの最初の消防隊の組織化，等です。

こうした，社会のために役立つ仕事をする一方で，彼は自分を道徳的に完成させる手段として，13の徳を考え，実践していきました。その徳の名称と戒律は次の通りです。

1．節制：飽くほど食うなかれ。酔うまで飲むなかれ。
2．沈黙：自他に益なきことを語るなかれ。駄弁を弄するなかれ。
3．規律：物は全て所を定めて置くべし。仕事は全て時を定めてなすべし。
4．決断：なすべきことをなさんと決心すべし。決心したることは必ず実行すべし。
5．節約：自他に益なきことに金銭を費やすなかれ。すなわち，浪費するなかれ。
6．勤勉：時間を空費するなかれ。常に何か益あることに従うべし。
7．誠実：偽りを用いて人を害するなかれ。
8．正義：他人の利益を傷つけ，あるいは与うべきを与えずして人に損害を及ぼすな。
9．中庸：極端を避くべし。たとえ不法を受け，憤りに値しても激怒を慎むべし。
10．清潔：身体，衣服，住居に不潔を黙認すべからず。
11．平静：小事，日常茶飯事，また避け難き出来事に平静を失うなかれ。
12．純潔：性交はもっぱら健康ないし子孫のためにのみ行ない，これに耽りて頭脳を鈍らせ，身体を弱め，または自他の平安ないし信用を傷つけるべからず。
13．謙譲：イエスおよびソクラテスに見習うべし。

フランクリンは，これらの徳が習慣になるようにするにはどうしたらよいかを考え，13徳全てを同時に実践すると長続きしないので，一定の期間どれかひとつに集中させ，その徳がある程度修得できたら次へ進む手法をとりました。また，1．～13．の徳の順番もよく考えた上でのことです。最初に節制の徳をもってきたのは，古くからの習慣の絶え間ない誘惑に対して警戒を怠らず用心し続けるには，頭脳の冷静と明晰が必要ですが，それを得るにはこの徳が役立つからです。この節制の徳を身につければ，沈黙の徳はもっと身につけやすくなります。フランクリンは，知識を得るには舌の力より耳の力によることが大と考え，沈黙の徳を第二に置きました。これと次の規律の徳を守ることができれば，計画や勉強にあてる時間がもっとできると彼は考えました。そして決断の徳が習慣になると，これ以下の諸徳を得るための努力が容易になります。その次に節約と勤勉の徳が身につくと，誠実や正義といった諸徳の実行が容易になります。12番目の徳，純潔の戒律は，フランクリンが自分自身への戒めとして書いてある面があります。フランクリンを形容する言葉にVORACIOUS（貪欲な）という言葉があります。彼はあらゆる面にエネルギッシュに取り組みました。そのあらゆる面の一つに性欲がありました。英雄色を好むといった感じで，妻以外の女性に子供を産ませ，妻デボラに育てさせたりしていますし，イギリスに滞在中は，奇行で知られ，性的乱痴気騒ぎが好きだったサー・フランシス・ダッシウッドと親密になり，彼の主催する乱飲乱舞の酒宴に参加しています。

彼の最も成功した事業に，1732年から出版し始めた暦があります。毎年新しい版を出し，25年間も続きました。彼の暦は普通の暦と違っていました。普通の暦に載っていることは全て載っていましたが，プラスアルファが載っていました。それは気のきいた面白い記事と殆ど彼が自分で作った金言が載っていました。その金言の大部分は倹約と勤勉を説いたものでした。フランクリンはその暦をリチャード・ソーンダーズという筆名で出版し，それに『貧しいリチャードの暦』と名付けました。この暦はベストセラーとなり，人々はそれを貪り読みました。その金言の幾つかをあげると次の通りです。

天は自ら助くる者を助く
眠る狐に鶏はつかまらぬ
雨だれ石をうがつ
失った時は二度と見つからぬ
塵も積もれば山となる
借金は苦労のもとなり
勤勉は幸運の母である
空の袋は真直ぐには立たぬ
早寝早起きは人を健康，裕福，賢明にする
時は金なり
力は勇気あるものに授かる
明日なすべき事あらば今日のうちにせよ

『貧しいリチャードの暦』の売り上げで裕福になったフランクリンは事業から身を引き，フィラデルフィアの郊外に引き籠もり，科学の研究に打ち込みました。これは，事業でお金を貯めて，それでトロイの発掘をしたシュリーマンを思い出させます。何かをするために，まず一生懸命お金を貯めて，それから自分の夢の実現に向かうこの二人の生き方はとても参考になります。こうしてフランクリンは多くの人々の役に立つ発明をしていくことになります。その一つに「フランクリン・ストーブ」というのがあります。当時の家庭用暖房は壁炉の火で，熱い空気が煙突を真直ぐ上ってしまい，室内を暖めることができないばかりか，冷たいすきま風も入ってきました。そこでフランクリンは鉄製のストーブを室内に備え付けることを考案しました。1740年のことで，これは瞬く間に広がり，フランクリンはこれを「ペンシルヴェニア式暖炉」と呼びましたが，人々は愛着を込めて「フランクリンストーブ」と呼びました。人々は彼にこのストーブの特許を取るように勧めましたが，自分も他人の発明の恩恵を受けているのだから，自分の発明も喜んで人の自由にすべきだと言って特許を取りませんでした。また，彼のアイデアに「音楽コップ」というのがあります。1757年彼が所用でロンドンに滞在していたとき，ガラスのコップのへりを濡れた指で擦ると音が出ることに気づき，コップの大きさや厚さによって違った音が出る装置を考案しました。この「音楽コップ」はしばらくの間非常に流行し，ベートーヴェンやモーツァルトもこれで演奏する小品を書いています。

晩年になっても彼の発明の才は衰えず，彼のような老人にとって生活が楽になる方法を考え出しました。年をとると近くのものが見えにくくなります。これは年とともに目の水晶体が変化するからで，このため老人は老眼鏡をかけなければなりません。また老人が近眼の場合は遠くのものを見る眼鏡もかけなければなりません。そういう老人は近眼用と老眼用の二つの眼鏡を持ち歩き，頻繁に取り換えなければなりません。フランクリンが２種の眼鏡が必要な年齢に達したとき，いつも読書をしていたので，そのたびに眼鏡を換えなければならず，彼はいらいらしました。そこで一つの眼鏡に２重のレンズをつけることを思い付きます。上半分を近眼用に下半分を老眼用にした眼鏡を考案したのです。それ以来，

多くの人々がそれをかけ，眼鏡をかけかえる厄介さから解放されました。また，フランクリンが80才近くになったとき，高い棚から本を取ろうと思いましたが，年寄には梯子は足元がおぼつかなく危険を感じたので，可動式のＹ字型の短い棒を先端に付けた長い棒を考案しました。Ｙ字型棒にひもをつけひもを引くとＹ字型の部分が閉じるようにしたものです。

大西洋に暖流が流れているのに最初に気づいたのはフランクリンでした。それから１世紀もたって，人々はようやく「メキシコ湾流」の重要性を認識し始めました。荒天の動きに注意して天気予報したり，燃料を節約する方法として日光節約時間を奨励しました。どちらの考えも重要性を持つようになりますが，150年間もそれは受け入れられませんでした。フランクリンは同時代の人々よりはるかに先に進んでいました。しかし，彼を世界的に有名にしたのは電気についての研究でした。

### ３．避雷針の発明

人類は稲妻を恐れてきました。稲妻は突然落ちてきて，木々をなぎ倒し，森に火をつけ家を壊し，人を殺すこともあります。殆ど全ての神話において，強い神が稲妻を支配しています。ギリシャ神話の中でも，稲妻は刀と同じように火で鍛えて作られた巨大な光り輝く恐ろしい刀であると想像されました。また火山が稲妻のような大きな刀を鍛えることのできる巨大な炉であると考えました。そしてシシリー島東岸にあるエトナ火山の奥深くに稲妻作りがいると想像しました。それは３人のキュクロプスで，額の真ん中に丸い目が一つある巨人として描かれています。３人の名はブロンテス（雷鳴），ステロペス（稲妻）それにアルゲス（輝き）でした。ギリシャ神話によると，タイタン族が太古のころ全宇宙を支配していました。タイタン族の首領であるクロノスは，危険なキュクロプス達を地下深くに閉じ込めていましたが，クロノスの息子達がゼウスの指導のもと，タイタン族に反抗し，10年間も戦争が続いたとき，ゼウスは地下に降りてキュクロプス達を解放し，自由にしてやりました。巨人達はそのお礼に稲妻を作ってゼウスに献上しました。その稲妻を武器としてゼウスはタイタン族を打ち破り，宇宙の主となることができたのでした。だからギリシャ人は，稲妻は，ゼウスの怒りにふれた人々を恐れさせ，罰するために地上に投げつけられるのだと信じました。ローマ神話ではゼウスにあたるジュピターが雷と稲妻を支配する神になりました。北欧神話でも稲妻は重要な役割を演じていて，北欧神話の中で２番目に重要な神トールは雷神です。

聖書の中でも雷雨は神の武器として描かれています。ユダヤ人やキリスト教徒は，稲妻が，ある場所や人に落ちると，それは神がその場所や人に対して怒りを示されているのだと考えました。雷を含めた天変地異は神々の怒りであるという考え方は現代でもなされていて，細木数子さんもそうおっしゃっています。稲妻は戦争や飢饉や病気とは違って，個人に対する罰であり，特定の人をその罰のために殺すのだと人々は考えました。嵐がおきて雷が鳴り，稲光がすると，多くの人々は自分の罪があばかれるのではないかと思って恐れ，隠れたものでした。またヨーロッパの異教徒は，キリスト教に改宗したあとも，ゼウスの稲妻やトールの火打ち槌のことを忘れませんでした。異教の神々は今や悪魔だと考えられていたので，嵐はその悪魔の手に委ねられていると多くの人々は考え，祈祷によって稲妻から身を守る試みがしばしばなされました。時には宗教的行列が行なわれたり，いろ

いろな聖物が高く掲げられたりしました。特に，教会の鐘がよく鳴らされました。それは悪魔はそのような神聖な音が聞こえるところでは無力になると信じられたからです。

しかしフランクリンは，稲妻は自然の法則に従う自然の力であると判断しました。稲妻はゼウスの矢やトールの槌や悪魔のものでもなく，電気であると考えていました。彼はこのことを証明しようとしました。彼は尖った物体は電気の火花を引き寄せるらしいことを知っていました。だから，もし雷雲が電気を含んでいるのなら，雷雲を放電させるには，長く尖った物体をできるだけ雲の近くまで上げればいいと考えました。フランクリンはヨーロッパの科学者達にこの考えを手紙で知らせましたが，賛否両論がおこってきました。そこで彼は劇的な実験でこのことを証明しようとしました。尖った棒を取り付けた凧を上げることを思いついたのです。

彼は尖った金属棒を凧の木の枠に結びつけ，それにある長さのより糸をつけ，これを凧を支えているひもに結びつけました。そして彼が手に持つひものちょっと先の方に鉄の鍵の形をした伝導体を取り付けました。尖った棒で捕らえられた電気はより糸と凧ひもを伝わって鍵の中に入るが，そこから先へは進ませないために絹で絶縁体を作りました。そしてライデン瓶（蓄電器）を鍵に接触させて充電させ，地上の電気と全く同じものであることを証明しました。

彼の実験のニュースがヨーロッパに伝わると，大評判になり，科学者や学者が実験を繰り返し，彼が正しいことが証明されました。彼は同じ年の1752年にロンドンの王立学士院の会員に選ばれました。理性の時代の人々は彼を誉め讃えました。ドイツの哲学者カントは彼を「新しいプロメテウス」と呼びました。プロメテウスはギリシャ神話のタイタン族の一人で，人類が創造されたとき，人類をあわれんで太陽から火を盗み，人類に与えました。

フランクリンはただ単に稲妻が電気であることを立証するだけでは満足しませんでした。電気を受けた棒が電気を地中に導く伝導体と結ばれていれば稲妻の被害を避けれるのではないか。そのような細工を家に取り付けたらどうか。彼はこの可能性のことを『貧しいリチャードの暦』の1753年版に発表しました。フランクリンが提案したこのような棒は，「フランクリン棒」(Franklin rod）とか「避雷針」(lightning rod or lightning conductor）とか呼ばれています。

## ４．アメリカの発明

科学者としてのフランクリンの仕事も偉大ですが，政治家としての彼の仕事はもっと偉大でした。植民地はイギリスの支配下にあり，英国議会は植民地に税をかけ，通商を統制し，知事や判事を送りこみ，13の植民地は自分達だけに関係のある事柄だけをある程度決定することができる状況でした。植民地の人々は英国国会議員を選べませんでしたので，国会議員に，不公平な税金や不利な通商条例に抗議してくれることを期待することはできませんでした。また，植民地の自治にしてもはっきりした取り決めはなく，英国王は好き勝手に統制できました。その一方で，英国の統治が好都合なこともありました。英国海軍によって植民地が海賊や敵国の攻撃から守られたことです。

当時フランスはアメリカ植民地北方のカナダと，西方のミシシッピ川流域全部を支配していました。イギリス植民地はアパラチア山脈と大西洋の間の狭く，細長い土地だけでしたので，安心できる状況ではありませんでした。フランスはインディアンと友好関係を結び，どんどん領地を広げようとしていました。

それに対して植民地は17世紀末から18世紀の中頃にかけてフランス人やインディアンと４回にわたり戦争を行ないました。英国の植民地統治には腹の立つことが多かったのですが，英国軍にフランスから植民地を守ってもらっていたので，フランクリンをはじめ多くの人々が英国とのさらに強い協力関係を望んでいました。そしてフランスとの大規模戦争が確実になってきたので，イギリス政府は1754年６月19日に「オールバニー会議」と呼ばれる会議を開き，植民地の代表とフランスに対抗するインディアン，イロコイ族の代表を集めて意見を聞きました。当時の植民地は横のつながりがなく，ひとまとまりの国民ではありませんでした。フランクリンはこれではいけないと思いました。フランス人に統治されている広大な領地は全て唯一の政府の支配下にあり，イギリス植民地が互いに争えばフランスに滅ぼされると思いました。植民地は互いに協力し合うべきだと思いました。こうしてフランクリンは，アメリカ史上連邦計画を提案する最初の人となりました。彼は，英国王に任命された長官のもとに，全植民地が連合し，大議会を作り，そこに各植民地全部の代表を送ることを提案しました。しかし，英国政府はそれでは植民地大議会の権限が強すぎると思ったので，その計画を却下しました。植民地も，国王任命の長官に権限がいきすぎると思ったのでその案を拒否しました。

フランクリンの連合計画が失敗したので，彼はフランスへの対抗策を計るためイギリスへいきます。彼は母国イギリスで有名になっていました。オックスフォードの大学をはじめ多くの大学が彼に名誉博士号を授与しています。彼は有力者達に会い，植民地がイギリス軍とともに断固フランスと闘うことを主張してまわります。フランクリンがロンドンにある間に植民地でのフランスの勝利が伝わってきます。一刻の猶予もありません。そこで，1757年，ウイイアム・ピットが首相になり，英国は本格的にフランスと戦争を開始し，ついにアメリカからフランスを追い払うことに成功し，1763年にフランスと平和条約が調印されました。フランス人が敗北するとオハイオ地域のインディアンはポンティアックのもとに連合し，植民地に対して戦いを始め，多くの砦がインディアンに攻め落とされましたが，1763年ついにインディアンは敗退しました。

フランスとの戦争は英国の大勝利に終わりましたが，別の問題がおこってきました。戦争で多額の費用を使った英国は，戦争の多くは植民地で行なわれ，植民地がその恩恵を被っていて，アパラチア山脈西方の土地を手に入れ，危険なフランスを排除してやったのだから，戦費は植民地人が出すべきだと主張しました。そこで英国政府は1765年に印紙条例を通過させました。それで，植民地人は新聞・雑誌及び結婚許可証や売り渡し証書など，全ての法的書類に貼る印紙を買わなければならなくなりました。新聞や法的書類は印紙なしでは発行することができず，印紙の代金はイギリス政府の収入となりました。

これに対して植民地人は全く異なった考え方をしていました。イギリス本国は自分の国の安全のために，そして外国貿易をもっと拡大するためにフランスと戦ってきたのだと思っていました。植民地人は北アメリカのフランスとの戦いで十分その役割を果たし，英国に恩義を感じる必要はないと思っていました。それに，植民地人は問題を討議する議会に自分たちの代表がいないのに，税をかけられるのは不公平だと感じました。マサチューセッツではジェイムズ・オーティスが「代表なき課税は暴政だ」といい，これが植民地のスローガンになりました。いろいろな植民地

が協力して印紙を買うことを拒否し，英国商品を買わないようにしました。フランクリンは英国議会においてこの問題を論じ，1766年に印紙条例は廃止されました。その後も英国政府は植民地に対していろいろな課税を要求してきますが，フランクリンは巧妙にこれらをかわしたので，1773年にはついに茶税以外の税金は取り消されました。しかし，植民地人は茶税にも強く反対し，1773年，茶を積んだイギリスの船がボストンに入港すると，インディアンに変装した植民地人の一団が茶を海中に投げ込むいわゆる「ボストン茶会事件」をおこしました。これによってイギリスの堪忍袋の緒が切れ，ボストンに戒厳令を敷き，イギリス兵を送り込む準備をします。戦争が避けられなくなり，フランクリンはイギリスを去り戻ってきます。

本国の攻撃に対して，植民地の指導者達は団結の必要性を感じました。20年前にフランクリンはフランス人に対抗する植民地連合を提案しましたが，こんどはイギリス本国に対して連合が必要になったのでした。1774年９月，植民地の代表がフィラデルフィアに集まりました。これが第一回大陸会議で，２カ月続き，植民地の立場を説明する国王への請願書を起草しました。しかしジョージ３世は譲歩せず，1775年４月にマサチューセッツのレキシントンとコンコードで初めて戦闘が行なわれました。直ちに第２回大陸会議の代表が選ばれ，会議は１年半も続きました。銃声の中で，独立を求める声が次第に強くなっていきました。独立の声は1776年にトマス・ペインの『常識論』が出てから一層強くなりました。1776年６月10日に大陸会議で独立宣言を起草する５名の委員が任命されました。ヴァージニアのトマス・ジェファーソン，マサチューセッツのジョン・アダムズ，ペンシルヴァニアのベンジャミン・フランクリン，コネチカットのロジャー・シャーマン，それにニューヨークのロバート・リヴィングストンの５名でした。ジェファーソンが起草し，フランクリンが手直しをしました。７月２日に独立が可決され，７月４日に採決されました。アメリカ人が敗けたら署名した人々は反逆罪で処刑されますが，多くの人々が署名しました。

しかし，戦うには弾薬がいります。それを提供できる国は一つしかありませんでした。それは昔の敵フランスでした。フランクリンがフランスを敵にまわし，東奔西走してフランスを打ち負かしてまだ20年もたっていませんでしたが，彼は弾薬提供を求めてフランスへ行きます。フランスの貴族や知識人はフランクリンを称賛し，英雄視していましたので，彼を暖かく迎えました。彼らは独立のために悪戦苦闘しているアメリカを助けるように政府に圧力をかけてくれました。そしてついにフランスはアメリカと同盟条約を結び，米仏連合軍はイギリスを破り，1783年にイギリスとの平和条約締結に至るのです。こうしてアメリカは新しい国家となり，大西洋からミシシッピ川まで，北の英領カナダと南のスペイン領フロリダの間の全ての領土を統治することになったのです。

しかしこの新国家には困ったことがありました。連合各州は本当には結びついていなかったのです。諸州が1781年に承認した「連合規約」というものがあるにはあったのですが，大陸会議の力は非常に弱く，守られていませんでした。大陸会議が諸州に課税しようとしても，各州は反対しましたし，寄付金を求めても出してくれませんでした。大陸会議が発行した紙幣は，金や銀の裏付けがなかったので，硬貨に替えることができませんでした。この紙幣は価値のないものとなり，今でも「一文の値打ちもない」という意味で，「大

陸紙幣の価値もない」(isn't worth a Continental）という表現が残っています。諸州は互いに論争したり，互いに関税をかけようとしたり，力に訴えると脅したりしました。これでは諸州はバラバラになってしまい，個々の小さな植民地になってしまい，ヨーロッパの各国と同盟を結び，隣の州に対する防衛でもしだしたら，それこそまたイギリスやフランスにつけこまれることになってしまいます。様々な方法でこれを回避し，強力な中央政府を作る方策が練られました。ヴァージニアのジェイムズ・マディソンとニューヨークのアレクサンダー・ハミルトンは諸州の代表者会議を開き，ついに1787年の会議で憲法を作ることに成功しました。アメリカは今なおこのときの憲法会議で起草された文書に従って治められています。

アレクサンダー・ハミルトンとジェイムズ・マディソンがこの会議の指導的人物で，ジョージ・ワシントンが議長を務め，ペンシルヴァニア代表が82才のフランクリンでした。大陸会議は憲法を承認し，諸州に送りました。諸州は次々に憲法を批准し，1789年４月30日にジョージ・ワシントンが初代大統領に就任しました。フランクリンは84才を超えていましたが，長生きしたおかげで35年前にオールバニー会議で提案した植民地連合案が実現するのを見ることができました。余命いくばくもないフランクリンにとって，気掛かりは黒人問題でした。独立宣言は「全ての人は平等につくられている」とあるのに，黒人は奴隷として扱われていました。彼はペンシルヴァニア奴隷制廃止促進協会の会長につき，1790年２月12日，国会に提出する嘆願書に署名し，この問題の処理を要求しました。これが彼の最後の公的活動となりました。1790年４月17日，85才でベンジャミン・フランクリンはこの世を去りました。今もアメリカ人は，エイブラハム・リンカーンの他には，ベンジャミン・フランクリンほど賢明で，偉大で，国のために尽くしたアメリカ人はいないと思っています。

## ５．ベンジャミン・フランクリンの子供の頃の逸話

アメリカの作家ナサニエル・ホーソーンは子供達のために偉人の伝記『伝記物語』を書いています。アイザック・ニュートンやサミュエル・ジョンソン等７人の伝記を書いていますが，その中にベンジャミン・フランクリンも入っています。ベンジャミン・フランクリンには『貧しいリチャードの暦』や科学者としての活躍，それに政治家としての業績の話等，華々しい話題が沢山ありますが，ホーソーンはフランクリンの子供の頃の逸話を書いています。それはホーソーンが，ベンの子供の頃の逸話に後のベンの大成の秘密を垣間見たからだと思います。

話は，10才の頃のベンの体験に絞られています。ベンは勉強もスポーツもでき，リーダーとして他の子供達から信頼されていました。ベンの父は知恵者として通っていて，町の行政委員や知識人が彼を訪ね，意見を聞くほどでした。そうした会話にベンは遠くの方で耳を傾けていました。ベンは当時の習慣で，大人達に意見を言うことはできませんでしたが，人々からは将来のある子とみなされ，大人になったら知恵のある言葉を話し，賢く行動するだろうと思われていました。それで，大人達は，この子を大学へやり，牧師にすべきだと勧め，父もそうしたかったのですが，子沢山で貧乏だったので，途中で小学校をやめさせ，家のローソク作りの仕事を手伝わせることになりました。ボストンの多くの家庭はベンの作ったローソクで明かりを灯すことになりましたが，これは，後にアメリカ全体

の光となっていくフランクリンを象徴するものとなっています。

べんはこうしてローソク作りで忙しい日々を送りますが，時間を作って仲間の子供達と釣りへいきました。彼は釣りが大好きでした。水車池で，ひらめ，すずき，うなぎ，たら等を釣って楽しみました。ここは当時は沼地で，足場が悪く，皆の不満のもとになっていましたが，ベンは自分達のためにもなり，みんなの利益にもなるアイディアを思いつきます。新しく家が建てられるところへやってきてベンは子供達に演説します。家を作るために置いてある石を示して，これで波止場を作ろうと提案します。これで家を作れば、それは一人の人の利益にしかならないが、波止場を作れば釣りをする人やそこを行き交う船等，万人のためになると訴えます。これを聞いた子供達は拍手喝采し，人のもので波止場を作ることの権利や正義について疑うものはいませんでした。石は重くて中々運べませんでしたが，ベンはジョークを飛ばして彼らを叱咤激励し，運ぶことに成功し，波止場を作り，万歳三唱して家路につきます。

朝になり，石がないのに石工達はびっくり。石工頭はまわりに子供達の足跡を見付け，後を追うと波止場へ着きました。これで石工頭はピンときました。この波止場は石工達も息を飲むほど見事にできていました。しかし，石工頭はみんなの利便性よりも，自分たちの権利や特権の方を大切に考える人だったので，石工の一人に警官を呼びにやります。警官はベン達をつきとめ，身柄を拘束しますが，石の所有者はベンの父を尊敬していましたし，ベンのやったことの愉快さに感心もしたので，すぐに子供達を解き放してやりました。しかし子供達には別の試練が待っていました。多くの父親はムチで打ちましたがベンの父は違っていました。父は賢明で，公正で，清廉潔白で，誠実で，人生に対して深い洞察力を持っていましたので，ベンは父を尊敬していました。そんな父がどんな裁きを下すのか息も止まる思いで父が口を開くのを待っていました。

どうして人のものを取った，と父。自分だけのためならしなかった。みんなのためにやった，とベン。ベンは自分の主張を繰り返します。それに対して父は次のように言います。「お前は石の所有者よりも世間の人々に対して大きな罪を犯したのだ。なぜなら盗んだもので波止場を作ることにより，お前は道徳的悪を犯したのだ。外見的便宜さのために永遠に正しいもの（道徳的正義）を犯すことほど恐ろしい誤りはないのだ。そのような原理に基づいて行動するものは，世界の良きもの全てを全力で破壊しようとするものだ。どんな行ないも，誰かに不正義をして達成されたものなら，それは全体の利益にはならないのだ。間違った行ないでも，正しい目的が達成されれば，それでよいと，神が定められたと思うか。人類の悲惨さは，悪は悪しか生まない，良い結果は良い行ないによってしか作りだされえないという真理を無視しているところからきているのだ。正義のルールを破るとその分世界に対して損傷を与えることになる。当座はよいように思えても，やがてこの世においても，永遠の相に照らしあわせても，そのことがわかってくる。」この言葉を聞き，ベンは頭を下げ，納得しました。ベンのその後の行動原理は，この善良で，聡明な父が教えてくれたことに基づくことになります。その後の人生は前章までに見た通りです。この父にしてこの子ありですね。

ホーソーンが，フランクリンの子供の頃の逸話に焦点を絞って書いてくれたお陰で，ベンジャミン・フランクリンのことをより深く知ることができたと思います。今年はベン

ジャミン・フランクリンの生誕300年であることを機会に，更にもっと深く彼のことを学んで自分の生き方の参考にできたらいいなと思います。

## 参考文献

1．松本慎一他訳『フランクリン自伝』，岩波書店，1982.
2．アイザック・アシモフ著，小山田義文訳『フランクリンと凧』，共立出版，1969.
3．G. R. ステュアート著，原島善衛訳『アメリカ文化の背景』，北星堂書店，1995.
4．津神久三著『画家たちのアメリカ』，新潮社，2000.
5．櫻庭信之他編『写真で見る英語百科』，研究者，1992.
6．田島俊雄他著『立体アメリカ文学』，朝日出版，1968.
7．World Expo 2005 U. S. Pavilion パンフレット
8．Benjamin Franklin, *The Autobiography*, Kenkyusha Pocket English Series, 1956.
9．Bill Bryson, *Made in America*, Kinseido, 1999.
10. Nathaniel Hawthorne, *Biographical Stories*, Kaibunsha, 1954.
11. Carl Van Doren, *Benjamin Franklin*, Penguin Books, 1991.